

村上重紀(著)
『老人ケアかるたーケアのなかの言葉』

遊び心豊かにケアの本質を描く

鎌田 實
(諏訪中央病院院長)

ぼくが、村上重紀の名前を始めて目にしたのは10年前のことだ。彼は三好春樹氏と稲川利光氏といっしょに『遊びリテーション』(医学書院刊、1989年)を引っ下げてケアのオモテ舞台に登場してきた。センセーショナルだった。彼らの視点の若々しさに脱帽したのを覚えている。

その名著の「あとがき」で村上重紀は「遊び心」とは、何かに恋すること、と語っている。地域包括ケアシステムの完成された保健・医療・福祉・を实践する御調町で、保健福祉総合施設付属リハビリテーションセンター次長として活躍しながら、したたかに「遊び心」を持ちつづけていた。村上重紀は老人ケアに恋をしているのかも知れない。そんな気がする。

ヨハン・ホイジンガは、人間を「ホモ・ルーデンス」(遊ぶヒト)と呼んだ。遊びを人間の本質と言おうとしたのだろう。村上重紀は人間の本質に迫る。本書のⅠ部「老人ケアかるた」は、ケアの現場での体験や見聞を現代風「カルタ句」として表現したユニークな創作「ケアかるた」であるが、その「かるた句」にいわく、「楽あれば楽あり」「ウソつきはケアのはじまり」「のど元過ぎれば、“私”を忘れる」などなど。村上重紀はい年こいて遊びつづけている。うらやましく思う。

「医のなかの蛙」——そうだ、そうだと思う。実にぼくも医のなかの蛙の一匹である。ヒエラルキーの頂点にひとり立つ悲しい蛙であるぼくは、村上重紀の言葉の重さに押しつぶされそうになる。医師だけでなく、「きのうの看護はきょうの寝たきり」と、看護の世界にも強烈な一撃を加える。さらにPT・OTの専門性を自省する。「専門が通れば、主体が引込む」。自らにも厳しい。「尻は床ずれ、余は情けない」——ユーモアに満ち満ちていながら、ちょっと物悲しい。これがいいんだなあ。

「痴呆は寝て待て」の句にみられる3つの雑感という分析もおもしろい。「構ってけれなきやグレちゃう」をもじって、老人たちは「構ってけれなきやボケちゃう

ぞ」と訴えている、というのである。また、老人の問題行動へのケアが日常となるなかで“慣れ”が問題行動を問題にしなくなる、という一種の達観にもおどろかされた。

「障害老人の心を動かすのに、私たち皆が『いい人』である必要はない。少しの工夫と、“関係”の存在である人間への少しの共感があるだけである。心が動けば体も動く。そしてやがては生活が動きだす」

村上重紀は「心と体」「人と人」「人と社会」の関係性を大切にしてきた。村上重紀はこうした数々の「老人ケアかるた」句の中に、老人ケアのヒントを見事な筆さばきで仕組んだ。実におもしろい本である。

また、本書のⅡ部「寸言至言ー老いの言の葉」は、老人や家族との関わりをのなかで耳にした忘れられない言葉を手がかりに個別ケアのありようを考えるケアエッセイであるが、「リンゴの気もちはよくわかる」「私を清書しなさい」など、ジーンとくる老人ケアの現実が村上重紀の筆で描かれている。すばらしい本である。一読をすすめたい。

愛すべき村上重紀の人柄を見事に浮かびあがらせる、詩のように美しい彼の文を紹介して終わりにしたい。

—— 言葉は不思議だ。たとえば1つ言葉で、1行の台詞で、一片の詩で、人は生きることができる。

施設や地域でたくさんの人と話をした。言葉は人である。言葉をたぐれば、いつでもその人の生活の場面場面が鮮やかに見えてくる。その多くは体と心の、そして生活の痛みから発せられるものだった。

にもかかわらず、いつもにこやかに、「ありゃあう」と話しかけてくれた失語症のIさん。

訓練の後、「遊ばんの？」とぼくらのリハビリのあり方を示してくれたOさん。

「う〜ッ」と、言葉にならぬ言葉のMさん。

「あーあ、何もわからん、アッハハ」の痴呆症のKさん……。——

再び一読をすすめたい。あなたの疲れた心に。

●B5変型 頁200 図77 かるた札122枚、定価(本体2,300円+税) 千400 医学書院・刊